

HDD 工法施工見学会・展示会開催される！

2日間で220余名の来場者 関心の高さうかがわれる

中山 正志

NAKAYAMA Masashi

HDD工法委員会委員

HDD工建協代表取締役



台風14号が通過する中、横殴りの雨と強風に見舞われながらHDD工法施工見学会・展示会がスタートした。9月7日(水)と8日(木)の2日間、場所は群馬県館林市の関根工業(有)内。およそ千坪という敷地には所狭しとHDD施工機械が並べられた。入口右側からフローモール、テラジェット、コマツBC70。正面にはグルンドドリルとデモを行うグルンドバースト機が立坑の中で出番を待っている。左に回ってディッチウィッチ、デモ施工の機械がすでにスタンバイしている。そして、ポリエチレン管や融着工具、ロケータなどが展示されているブースとくる。奥に入り下水関連の推進機、銅管製の差込み式継手、それと立坑内設置型ミニHDD機や既設銅管を抜管撤去しながら新設のポリエチレン管を引き込んでくるという機械も展示されている。

9月7日午前10時開場だ。午前中は人もまばらだった。昼からは雨はやんでくれた。来場者も増え、ホッとした。13時30分より公民館にて主催者側の挨拶とHDD工法の概要説明、管材の説明が行われる。壇上にはJSTT石川副会長が立つ。「HDD工法は欧米では当たり前に使われている。こんな素晴らしい工法なのになぜ日本では普及が遅れているのだろうか。」と訴える。すでに公民館はほぼ満席で70名余りが資料を片手に熱心に耳を傾けている。JSTT森田事務局長よりHDD工法の概略説明が始まる。ここで展示されている各種HDD施工機械を紹介する。つづいてHDD工法の普及拡大のため水道分野にもっとポリエチレン管を使ってもらおうと水道用ポリエチレンパイプシステム研究会を代表して奥村技術委員が、配水用ポリエチレン管協会を代表して栗尾技術委員が説明に入っ

た。サンプルをまわし、ポリエチレン管の安全性を訴える。(写真-1)

外に出た。風は相変わらずやむことはない。まずディッチウィッチの機械によるデモ施工が始まる。テストフィールドを囲んで来場者は熱心に説明を聞く。施工距離は45mほど。あらかじめ到達の3m手前までは削孔済みである。あとは小水路を下越して到達ヤードへという段取り。位置計測(ロケータ)係が無線で機械のオペレーターに時計にみたてた方向指示を出す。ロッドが到達する。引き込む管はポリエチレン管φ75だ。パッキンマ取り付けなどの段取替えの時間をぬって、グルンドバーストのデモ施工に入る。これはHDD工法ではないが、経年管の入替工法として注目を集めている機械だ。この日は、既設銅管Φ100を切り裂き新設ポリエチレン管φ150を引き込んでこようというもの。20mの距離をものの30分で引き込みが完了した。翌日は硬質塩ビ管を破碎することとしている。先程のデモ施工のパイプ引き込みが始まっている。こちらも40分足らずで引き込みが完了した。各ブースに目をやってみると説明員に熱心な質



写真-1 1日目冒頭あつをするJSTT石川副会長



写真-2 PE管を引込む前の状況

間を繰り返しているようだ。管材のブースに人が集まってきた。エレクトロフュージョンとバット融着の接合デモが始まっている。展示場奥の抜管撤去の機械にも関心が集められている。多くの事業者の頭を悩ましているのが経年管の入替のようだ。(写真-2)

この日はとうとう風がおさまることはなかったが、それでも100名余りの来場者があったということは主催者側の期待を裏切ってはいなかった。

2日目は台風一過。うって変わっての猛暑だ。昨日と同じ段取りで進められるが、この日は農業用配水の本施工が行われる。壇上にはJSTTの松井会長が立つ。HDD工法の普及を訴える。100名余りが耳を傾け、公民館には立ち席も出るほどだ。(写真-3,4)

本施工が始まった。引き込む管はポリエチレン管φ100、距離は55m。使用する機械はデモ施工と同じディッチウィッチだ。土質はロームで軟らかい。この日もあらかじめロッドを通しておく。比較的交通量の



写真-3 2日目冒頭あいさつをする松井会長



写真-4 立見でもるほど大盛況

ある1級の市道を横断しなければならない。この工法であれば特に交通規制をかける必要はない。稲刈り間近の田圃の中からの引き込みとなる。機械の周囲を熱心な見学者が取り巻く。引き込みも順調のようだ。(写真-5)



写真-5 パネルを使って工法説明をする出展者

こうして2日間にわたるHDD工法施工見学会・展示会の幕は閉じた。

ある水道事業者の人は、「この工法については聞いたことはあったけど、こうして実際に見るのは初めてだし、本施工まで見学できて大いに勉強になりました。」といい、「(採用を)検討したいという気持ちからは是非採用したいという気持ちになりました。」と続けた。

また、多くの来場者は「(今回来られなかった人もいたので) 今後もこういう機会を持っていただけないだろうか。」と口を揃える。

気になるアンケートの結果だが、発注者、施工会社、コンサルタントなど回答者のおよそ9割が「是非採用したい」「検討したい」と回答している。その理由としてもっとも多かったのはコストメリットであった。道路復旧費と工期短縮をあげている。次に施工環境である。開削困難な国・県道の縦横断にそのニーズは集まっているようだ。もちろん工事環境問題も差がなく続く。およそ1割強が「今のところ考えていない」と回答しているが、これはこの工法に否定的というのではなく、機会があればと読み取れる。

実のところこれだけ関心が高かった事は驚きであった。アンケートの最後にはほとんどの人が「有意義だった」「参考になった」「勉強になった」と書き込んでいる。

閉会に当たりJSTT森田事務局長は、「悪天候と猛暑の中、2日間で220余名の方々が来場くださったことは大変ありがたい、よかったという気持ちでいっぱいです。これからもJSTTがHDD工法の普及発展の一助になればと思っています。」と結んだ。